



強調し過ぎる見える学力

学習指導要領が改訂されるたびに、子どもたちの学力低下と基礎・基本のとらえ方が論議されてきた。今次の改訂で、論議に終止符を打つかのように「基礎・基本は学習指導要領の目標と内容の総体」と定義され、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図ることが喫緊の課題となった。その課題の取り組みの成果が、学力向上フロンティアスクールの最終年度の発表として、各地で行なわれている。

指定校でなくても、学習内容を定着させるのに、朝読書、〇〇タイムと称した漢字や計算のドリル時間が、生活時程の中に設定されている学校が多くなってきている。これ自体は悪い事ではない。むしろ大切な力を培う場になっていると考えるが、それらが授業時数外にある場合、子どもの生活が圧迫されていないだろうかと不安になる。また、「読み」「書き」「計算」を基礎・基本の学力最優先の連呼で、訓練的な学習スタイルの蔓延を危惧する。さらには、世界トップの学力向上実現のため、競争意識を育てる「全国学力テスト」の実施の私案公表(11月4日経済財政諮問会議で中山文科相)がされた。

急務なのはトータル性とバランス性!!

我々は、再度、新教育課程が求める学力を問いたい。生きる力を求めているはずなのに、最近、表面的な見える学力の結果のみに、一喜一憂している傾向が強い。子どもたちを学力向上という学校の使命にさせるなら、教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間のなかで、バランスのとれた学力向上がなされなければならない。

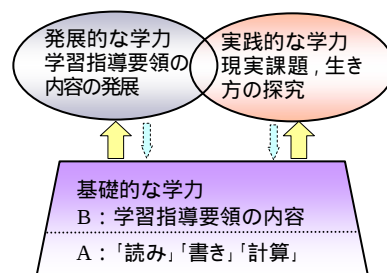
「読み」「書き」「計算」ができれば、手本のないこれからの社会を生きていけるかといえ、無理である。仕事をこなすだけの時代は終わり、仕事を創り出せる人が求められる。このような社会要請を考えると、基礎的な学力とともに発展的な学力や実践的な学力が必要な理由も分かる。見える学力(結果の学力)だけで子どもたちに競争意識を奮起させるとどうなったか、過去の教訓を生かしたい。教師として、見えにくい学力(過程で発揮する学力)も重視していることを子どもの姿で伝えたい。

(芝)



教える内容と考えさせる内容を明確にする

新教育課程が求める学力の関係



「新教育課程で育てる学力と新しい授業づくり」吉崎静夫著 ぎょうせい P14